

〈詩学〉が十数年来僕が中心的に仕事をしていく研究領域である。詩学は、しかし、単に詩法や詩の理論の研究や、文学の諸原理・諸法則を研究する学問を指すのではない。また、ロシア・フォルマリズムや構造主義批評以後、言語学モデルの文学研究への導入が一般化し、詩学という呼称の現代的な賦活がそこに由来しているとはいえず、詩学は言語学やその他の人文諸科学へと還元し得るものでもない。今日、詩学とは、〈近代〉という文化の制度においては、〈文学〉という名のもとに分類されてきた言説のなかに集中的に現れている人間の言語活動や意味活動一般についての知を、他の周縁的な人文・社会諸科学との対話の中に投げ入れるポリフォニックな作業を指す、と僕は思っている。

詩学の学的作業には四つのレヴェルが存在すると僕は考えている。第一は、言語・詩的言語の研究であり、従来、人、精神、心理、思想といった十九世紀のタームで語られてきた文学現象を「言説」や「テクスト」として理解・分析しようとする作

業である。第二は、人間の言語活動の、ヤコブソンの用語を使うなら、「詩的機能」の研究であり、文学に限らず、神話、宗教、民話から、幼児言語、精神病者の言説、あるいは広告コピーや諸々のサブカルチャー現象に至るまで、

## 詩学の探究

石田英敬

様々な文化現象に現れる固有な言語・記号活動を理解しようとする作業である。第三は、以上二つのレヴェルの研究実践から得られた言語活動についての知を理論作業へとフィードバックし、言語活動の一般理論の構築に寄与する作業である。そして最後に、第四は、そのように形成される言語の一般理論と、隣接する人文・社会諸科学との間に、認識論的な対話を組織する作業である。無論、以上の四つのレヴェルの作業は、必ずしもこの順序に行われるわけではないし、また相互に孤立して実行されることもない。むしろ、それらは相関的に、それぞれのレヴェルを絶えず往還しつつ実現されるのである。

僕の研究者、教育者としての具体的な仕事との対応で言えば、これまで狭義の「フランス文学者」として取り組んで来た十九世紀フランス文学の研究、特にマラルメの詩の研究は、上記の第一のレヴェルに対応するのだし、授業やゼミで扱っている記号論や精神分析に基づく社会・文化現象の読解・分析は、主に第二のレヴェル、そして、言語についての理論作業、現代思想についての論考や講義は第三及び第四のレヴェルに関わっている、ということになる。そして、それら全てが僕にとつては〈詩学〉のトータルな作業を成していると思つてゐる。

そうした詩学研究のなかで、僕が今中心的な関心を持つている問題が幾つかある。〈リズム〉はそのようなタームのうちの一つ、とりわけ詩的言語から出発する言語理

## 「私の研究」

論である詩字にとつては、試金石ともいえる問題である。リズムは、言葉にとつて最も基本的な要素でありながら、言語学的な知からは往々にして排除されてきた。しかし、言語活動において単独な〈生〉、固有な〈意味〉が成立するとしたら、それはそれぞれの発話を構成している音韻やリズムによつてである。僕たちが、忘れ得ぬ人々の、あるいは愛する人の声を幾度も心のなかで聴くとしたら、それは発せられた言葉の抽象的な意味を受け取るためではなく、それら特権的な他者たちの発話の固有なリズムを反復することによつて、それらの人々の言葉のかけがえのなさ、つまり単独な意味を聴き取ろうとするためなのだ。詩は、優れて、そうした言葉の働きを開示してくれる言語活動のあり方なのであり、日常生活においては意味経験の共同性の規範によつて隠べいされている言語活動に固有な生の次元を明かしているのである。だから、詩の言語の理論は言語活動における〈単独性〉の理論となることができなのだ、と僕は考える。そして、このような前提から出発し

て僕はいま、構造の一般性の理論が捨象してきた言説の〈歴史性〉の問題や、従来のコミュニケーション論の間主観的対称性の図式に対立する〈他者性〉の問題、あるいは文化システム間コミュニケーションとしての〈翻訳〉の問題などを考えようとしていくところである。それに対して、一般性のレヴェルで意味を交換し、流通させる、人間の文化活動として〈記号〉現象がある、というのが僕の考えでもある。そして今日の消費社会では、そうした記号の支配はますます拡大しつつあるのである。

構造主義やポスト構造主義、あるいは記号論、精神分析、情報理論、ネットワーク論などが興隆した一九六〇年代以降、言語理論は一専門領域での学であることをやめて、人文・社会科学諸部門の研究をインテークフェイスする特権的な知の場所を構成して来た。他方では、しかし、「ポスト・モダン」という言葉とともに〈近代〉の終焉が語られ、例えば現在の大学の状況に顕著に見られるように、文学的教養が後退しつつある今日、言語や文化や社会を考える際に

〈文学〉が捨象される傾向が一般化しつつあることも事実だ。その点で、文学言語を含む言語の一般理論を構想する〈詩学〉は、今日僕たちの世界で進行しつつある「意味や主体の記号化」や「他者性の消去」の現象に対する独自の批判的視座を提供しうる、と僕は考えている。

(大学商学部助教授)

夏休みも半ばを過ぎ、人影もまばらな大学の研究室のドアに遠慮がちなノックの音がした。四月に発足したばかりの大学院アメリカ研究科のA君である。夏休みあけに提出するはずの「研究計画」が暗中模索の状態でという。さえないA君の顔色が二十年前の私のそれと重なった。私自身、現在の研究テーマに漂着するには随分時間がかったように思う。

アメリカ文学にあまり馴染みのない人で、世界文学全集に収められている『白鯨』という小説をご存じの方は少なくないだろう。あるいは、グレゴリー・ベックと白鯨とのスクリーン上での死闘を思い出しただけだよ。修士論文にハーマン・メルヴィルの『白鯨』をとり上げた私は、その後メルヴィルに関する二、三の論文を書く、メルヴィルの世界から一目散に逃げだした。メルヴィルと共に、身もすくむ懐疑の砂漠をさま迷っていたら、早晚、胃に穴があいて死んでしまうと思っただからである。メルヴィルの世界から遁走した私は、十九世紀、二十世紀のアメリカ小説を行きあ

たりばったりと読むことになるのだが、後で考えると、この行きあたりばったりが、けっこう好運な行きあたりばったりだったように思う。私の読書は、一八三〇年代から五〇年代にかけての、いわゆるアメリカ

## 世紀転換期の反近代主義

佐々木 隆

カ・ルネサンス期の文学、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての文学、そして、ピート・ジェネレーションを中心に、一九五〇年代から六〇年代にかけての文学に片寄っていた。そして、アメリカの大学院でアメリカ研究を学ん

だことが、文学作品を読む際に、作品を生み出した文化や社会との関わりを考えながら読む習慣を身につけさせた。右に挙げた三つの時期は、アメリカ社会が急速に近代化する激動の時代である。それぞれ

それぞれの時代が生み出した文学は、概ね、時代の趨勢に対して批判的な立場に立つものであった。私は、いつの頃からか、「アメリカ文化は、多くの場合、反発し合う、相異なつた二つのデイスコース（言説）から成り立っている」という認識を抱くようになった。すなわち、合理主義や効率を重んじ、アメリカ文化や社会を主導するデイスコース（近代主義）と、主流をなすデイスコースを批判的に眺め、自然の調和や人間性の復権を強調するカウンター・デイスコース（反近代主義）が存在し、これら二つのデイスコースが、互いに表糸、裏糸となつてアメリカ文化や社会を形成してきた、とみるのである。「アメリカを批判することはアメリカの伝統である」という言葉がある。文学や芸術は、多くの場合、カウンター・デイスコースを形づくってきたと私は考えている。私のこの考え方は、大筋ではとりわけ目新しいものではなく、多くの文学・文化研究者が理解を同じくするところだろう。要は、この主張をどう例証していくかだ。

## 「私の研究」

こうして選んだのが、先に挙げた三つの時期のうちの二番目、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての世紀転換期である。近代主義と反近代主義との新たな葛藤の時期にさしかかりつつある二十世紀末の今日、最低限遡るべきは、現代社会の原型が形成された世紀転換期だと考えるからだ。

「合理主義および効率」対「自然と人間性」という対立の図式は、先の三つの時期のいずれにも共通している。問題は、各時代によつて、近代主義および反近代主義の表現の様式がどのように異なるかだ。

私の目下の課題は、世紀転換期の急激な産業化・都市化に、アメリカのイマジネーションがどのように対応したか、その特質の一端を、大衆文化、絵画、思想、文学の面から立体的に解明することである。弱足の私がこれらの領域のすべてに通暁することは不可能に近い。せいぜいそれぞれの分野のヒーローを一人ずつとり上げるのが関の山だろう。私の計画は、まだ半分も達成されていない。それでも、世紀転換期の相隣接するイマジネーションの領域に、近代

主義に対する共通した反応があったことが見え始めている。

百年前、近代主義の本格的な台頭に直面したアメリカ人たちは、現実の世界とは対蹠的な世界を想定することによつて、現実と理想との距離を測ろうとした。フィラデルフィアの知的エリート、オーエン・ウィスターは、貧しさと重労働にあえぐ現実のカウボーイが消滅しつつある時代に、ヒーローとしてのカウボーイを発明し、失われつつある自然と勇らしさを復権しようとしたし、写真主義の代表的な画家ウィンストロ・ホーマーも、北海の漁婦やアディロンダックの森の猟師、バハマの黒人たちの漁の生活に、あるべき人間の姿を見出した。アメリカが生んだ最高の知識人の一人、ヘンリー・アダムズが、十二、三世紀のゴシック建築に憧れ、聖母マリアに帰依したことは周知のとおりである。

このように、世紀転換期の人々は、知識人のみならず、一般大衆をも含めて、過去および未来に「あるべき世界」を想い描くことによつて、急激な近代主義の台頭に疑

問符を投げかけたのである。その際、多くの人々が、人間の在り様の原点に立ち返ろうとし、自らの思想を視覚化する上で、心理学者カール・ユングが言う「元型」的イメージに強く依拠したことは、きわめて興味深い。

仕事は緒についたばかりである。先は長い。そして、このような既存の学問領域を横断するような、一見ディレクタント的なアプローチは、既存の学問分野では許されないのかもしれない。けれども幸いなことに、私は、学際的・総合的研究を看板に掲げるアメリカ研究所の研究員である。その特権を存分に活かしたい。

(大学アメリカ研究所教授)

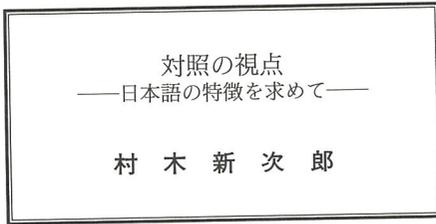
わたしは、ときに他言語を通して日本語をながめてみることもある。自分の母語は、無意識の中にあつて、なかなか意識化されにくいものである。

ふたつ、あるいはそれ以上の言語を対比して、共通点や相違点をあきらかにするという言語間対照は、言語研究の重要なテーマである。対照研究によって得られた知見は外国語教育の実践に役立ち、対比したそれぞれの言語の特徴をしるうえで有益である。さらに、言語の普遍性や類型学への寄与といったことも期待されるであろう。日本語も立場をかえれば外国語である。今日、外国語としての日本語という表現は耳新しいものではなくなつた。

言語の対照といつても、そこには大きく二つの側面がある。言語そのものの体系をいう場合と言語の運用面をさす場合とである。当該の言語がどのような音声上の単位(音素)や意味上の単位(単語)をもち、どのような文法形式を発達させているかという問題は前者に属し、その言語の使い手かどのような場面での言語をどう使うかと

いった問題は後者に属する。わたしの関心は、当面、外国語を通して浮き彫りにされる日本語の語彙や文法現象に限定される。単語の意味は現実や人間の意識を反映しているものである。ある言語の語彙が外界

をどのように写し取っているか、そして他の言語と比較してどのような特徴があるかをしることは興味深いことである。語彙は、議論の余地はあるとしても、その言語を使用する



人々の文化、生活様式、思考様式といったものと相關しているものと思われる。単語は現実の断片を切り取っているのだが、その切り取り方には言語によって偏りが生じているはずである。気象に関わることば、動植物に関することば、位置関係を表わすことば、評

価を表わすことば、……、語彙全体の中で、あるいはそれぞれの意味分野において、日本語にははたしてどのような特徴がみられるのだろうか。たとえば、植物を表わすことばで、樹木・花・実がどのように語彙化されているか、どれが基本であるかなどを問うてみる。日本語の「桜(樹木・花)」「桜んぼ(実)」と英語の「cherry」「cherry tree」「cherry blossoms」とでは、基本と派生が逆転している。「花」をドイツ語のように Blume (草花)と Blüte (果樹の花)と一次的に区別する言語もある。中国語の常用語のリストに「向日葵(ひまわり)」が「花」のグループではなく、「花生(落花生)」や「芝麻(ごま)」と同様へ穀物・野菜・果物の仲間としてあがっていたのは驚きであった。語彙を構成している単語の意味と形式における類似性・対称性・階層性などを調べることによつて、言語を超えた普遍相と個別言語の特殊相が明らかになるものと思われる。もちろん、このような接近を進めるには、語彙のリストの等質性・単位・単語の多義性など様々な困難がたちはだかつ

## 「私の研究」

でいて、解決すべき課題が多いのではあるが。

言語の対照は、語彙や文法の体系性をするうえで多くのことを教えてくれる。たとえば、意味が相互に向かい合っている関係の反義性は、語彙を体系化している重要な要素のひとつであるのだが、この反義対を構成する単語間に、平行した語形上の特徴をみいだすことがある。西洋の言語では、状態の変化をめぐって反対の方向性をもつペアに反義対の一方が他方の派生形であるといったことが目だつのである。英語については、*appear—disappear*、*tie—untie*、*load—unload* などがあり、ドイツ語では *binden—aufbinden*、*hängen—abhängen*、*lernen—verlernen* などがそうである。日本語では、このような意味領域における反義対は、*〈現われる—消える〉*、*〈むすぶ—ほどく〉*、*〈しめる—あける〉*、*〈覚える—忘れる〉* といった、語形上、共通部分をもたない二つの単語で語彙化されており、英語やドイツ語にみられるような一方が派生語であるというような例はみいだせない。

い。反義対の他のタイプに視点のからんだペアがある。意味論で、*converse* と呼ばれるもので、*〈やる—もらう〉*、*〈貸す—借りる〉*、*〈教える—習う〉* のような関係をいう。中国語では、このような授受関係を表わすことばは、授受の立場を考慮しないで、方向性を欠いた単語が多くみいだされる。授受の立場は文構造で示されることになる。「給」は「やる」「もらう」に「借」「租」は「貸す」「借りる」に、「授」は「授ける」「授かる」に対応する単語で、いずれも視点を考慮にいれないかたちで語彙化されている。英語の *rent* にあたるような単語が中国語には多いわけである。「看病」は医者が患者をみる場合にもその逆の場合にも用いられるもので、やはり、視点をぬきに語彙化された単語である。ある言語で、対になる状態の変化を基本形と派生形で語彙化したとき、別の言語で授受関係を表わす領域で視点を排除した語彙化が目だつといったことは、それぞれの言語の語彙体系上の特徴といえるだろう。こうした特徴は異なる言語間の対照によってうかがいでてくるもの

であって、個別の言語を追い求めるだけではみえてきにくい。日本語では対人関係を表わすことばが豊かであるが、他の言語では、しばしばその特徴が消えてしまう。

文法は言語の形式面であり、言語のちがいがもつとも意識される分野である。語順や語形上の対立にもとづく形態範疇は、文法の顕在的な部分であるが、それだけでは、十分な文法現象の記述ができない。直接には形式上の対立としては表われてはいないものの、継起的な構造に関与し、ある語形の文法的意味の違いに関わってくる潜在的な文法範疇をさがしだす必要がある。それは、ある単語群の語彙的意味の中にひそんでいて、語彙的な意味の一般化であると同時に文法範疇でもある。ある言語では顕在的な文法範疇が、別の言語では語彙的な意味の中にかくされているといったことがしばしばみいだされるのである。他言語をすることは、そのような潜在的な文法範疇を発見するきっかけにもなる。

わたしは、ただ回り道をしているだけなのかもしれない。

(女子大学教授)